あった．多くはフトボナガボソウであったが，それに混じって花が白く薄く紫色を帯びた別の種類があった．調べてみるとこれが *S. cayennensis* (L. C. Rich.) Vahl に該当することがわかったが，小笠原のものとは明らかに別の種類である．ナガボソウ属は南アメリカ原産で多くの種類があり，アジアや太平洋諸島には幾つかの種類が野生化しているが，帰化植物のため学名の決定はかなり難しい．H. N. and A. L. Moldenke (Dassanayake et Fosberg ed., Fl. Ceylon 4: 246–267, 1983) が長年の蓄積をもとにして，セイロンに帰化しているこの類の詳細な報告をしている．それに拠るとナガボソウは *S. urticifolia* (Salisb.) Sims とするのが正しいことになる．

フトボナガボソウは花序の軸は無毛で太く，果実が軸に食い込んで作る溝は軸の幅より著しく狭い．ナガボソウは花序の軸や包葉の縁に短毛があり，果実の溝と花序の軸とは殆ど同じ幅である．花は共に濃紫色である．現在の所，日本にはこの2種類しか帰化していないようであるが，初島氏の琉球植物誌のナガボソウの記述には，花の色や葉の鋸歯などに *S. cayennensis* を思わせる部分もあるので，琉球にはほんとの *S. cayennensis* やそれに近縁の *S. dicotoma* も帰化しているかもしれない．これらは花序の軸に多細胞の白色の長毛がやや密にあるので，容易に区別できる．

琉球を含めた熱帯地方のナガボソウの標本を貸して下さった，琉球大学の島袋敬一氏に深謝します．

（東京大学理学部附属植物園）

アマミイケマについて（山崎　敬）

Takasi YAMAZAKI : On *Cynanchum wilfordii* var. *amamianum* Hatusima

アマミイケマは実物を見る機会がなく，実態がわからなかった．最近この属を纏める必要があり，奄美大島の田畑満大氏から実物を送っていただいたところ，コイケマの変種とされているが，コイケマとは全然別のものであることがわかった．奄美のものは副花冠がよく発達し，その内側に突起が隆起している．この性質はコイケマではなくイケマに見られる性質である．したがってイケマと同じ Endotropis 節に属す種類である．イケマの花序はほぼ散形に花がつき，花弁は白色であるが，奄美のものは花序は軸がやや伸びて散房状であり，花弁は淡緑色である．奄美によく似たものは台湾から中国・ヒマラヤに分布する *C. auriculatum* Royle ex Wight である．この中でも台湾のものに似ている．ヒマラヤのものは萼片はほぼ無毛で縁に長毛があるが，中国・日本のものは全体にまばらに短毛がある．また中国のものは副花冠が長楕円状卵形で，蘂柱の約2倍の長さがあるが，台湾・日本のものは副花冠は卵形で蘂柱の1–1.5倍である．以前，副花冠の形で台湾のものを別種としたが，その後，台湾や中国の標本が増えてくると，それで両者を別種として区別するのは無理であることがわかってきた．ヒマラヤから日本まで同一種類とするのが妥当であろう．ただこれらには地域ごとに異なる3型が認められる．

ヒマラヤ地方のものは花が大きく，萼片は長さ約3 mm，花冠裂片は長さ 6–7 mm，副花冠は卵形で蘂柱の約1–1.5倍の長さがある．

中国のものは花が小さく，萼片は長さ約2 mm，花冠裂片は長さ 3–5 mm，副花冠は長楕円状卵形で，蘂柱の約2倍の長さがある．

台湾・琉球のものは，花の大きさは中国のものと同じであるが，副花冠は卵形で蘂柱の1–1.5倍である．

Cynanchum auriculatum Royle ex Wight, widly distributed from Himalays to Japan (Is. Amami-ohshima only), is separated into three local forms.

They are differentiated as follows:

A. Sepals ca. 3 mm long; petals 6–7mm long;

corona ca. 3 mm long, 1–1.5 times as long as the gynostegium ……var. *auriculatum*

A. Sepals ca. 2 mm long; petals 3–5mm long.

B. Corona oblong-ovate, ca. 3mm long, 1.5–2 times as long as the gynostegium …… var. *sinence*

B. Corona ovate, ca. 2 mm long, 1–1.5 times as long as the gynostegium …… var. *amamianum*

Cynanchum auriculatum Royle ex Wight, Contr. Bot. Ind.: **58** (1834), not seen ; Hook. f., Fl. Brit. Ind. 4: 25 (1883).

var **auriculatum**

Distr. Himalayas, from Kashmir to Nepal.

var. **sinense** Yamazaki, var. nov.

Flora minora; sepala ca. 2 mm longa, petala 3–5 mm longa; corona oblongo-ovata, ca. 3 mm longa, gynostegio ca. duplo longior.

Hab. China: Shanxi, Taksyu–Ranshating (Tatewaki et Hurusawa, Sept. 6, 1941). Jangxi, Lushan (N. Fujita, Sept. 28, 1943). Shanghai (K. Kimura, Sept. 26, 1934). Hupeh (Henry, no. 4272, **Type** TI, ibid. Henry no. 4379). Hubei, Shenlungkai (Chow, no. 76004). Sichuan, Omei-shan (Chiao et Fan, Aug. 23, 1938). Yunnan, Kunming (Murata et Yamazaki, Oct. 11, 1979).

Bhutan: Thimphu, Taba 2400 m (Grierson et Long, Jul. 17, 1979, no. 2715).

Distr. C. to W. China and Bhutan.

var. **amamianum** (Hatusima) Yamazaki, comb. nov.

Cynanchum wilfordii (Maxim.) Hemsley var. *amamianum* Hatusima in Hokuriku J. Geobot. **12**: 10 (1963).

Cynanchum taiwanianum Yamazaki in J. Jap. Bot. **43**: 169, f. 1–A, f. 2, 6–9 (1968), syn. nov.

Distr. Taiwan and Ryukyu (Is. Amami-ohshima).

（東京大学理学部附属植物園）

ペラペラヨメナの和名（山崎　敬）

Takasi YAMAZAKI: On Japanese Name of *Erigeron karvinskianus* DC.

ペラペラヨメナは西日本にはよく帰化しているようだし，関東でも神奈川県や群馬県からの報告はあるが，東京付近では見かけることがないので，あまり気にしたことがなかった．たまたま岡山の小畠裕子氏がマダガスカルから採集してきた標本の中にペラペラヨメナがあった．石垣に生えていたという．ペラペラヨメナは日本のみならず，ヨーロッパからアフリカ，ヒマラヤなどに広く帰化している植物なので，特に珍しいものではない．この植物が日本でも時に栽培されている *Erigeron mucronatus* DC. によく似ているのに気がついた．較べてみたら同じものであることがわかった．共にメキシコ原産で，最近では同種として扱われている．同じ頁に同時に新種として発表されたものであるが，同種とする時は *E. karvinskianus* DC. を使用するとされているので，学名としてはペラペラヨメナに使用されている名に変更はない．しかしこの植物は明治の末に園芸植物として導入され，その英名である Mexican Daisy からメキシコヒナギクの名で呼ばれている．ペラペラヨメナとメキシコヒナギクではずいぶん感じの異なる名である．和名には先取権がないからどちらの名でも良いけれど，この植物の花は小さくて見栄えがしないが，小さな葉を付けた細長く伸びる茎は，鉢植にして懸崖作りにでもするとヒナギクの名に負けない見栄えのするものだと思う．恐らくそのような目的で導入されたのであろう．一度植えるとやたらにはびこる丈夫な植物で，帰化品はこうした栽培からの逸出であろう．

（東京大学理学部附属植物園）